

琉球大学学術リポジトリ

澎湖群島における先史文化研究

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2016-01-27 キーワード (Ja): 台湾海峡兩岸地域, 澎湖群島, 先史文化, 地域間交流 キーワード (En): 作成者: 後藤, 雅彦, Goto, Masahiko メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/33125

澎湖群島における先史文化研究

後 藤 雅 彦

Masahiko Goto

Study of Prehistoric Culture in P'eng-hu Islands

キーワード：台湾海峡兩岸地域、澎湖群島、先史文化、地域間交流

はじめに

台湾海峡の間に存在する64の島々で構成される澎湖群島は、澎湖島から大陸まで最短140km、台湾本島まで最短45kmの距離にある（第1図）。同群島内にある考古遺跡の研究は、台湾海峡兩岸の地域間交流を追求する上で重要な位置関係にあるばかりか、島嶼域における人々の多様な生活形態を示す点においても注目される。

同地域における主な考古学調査は、1940年に実施された国分直一氏による良文港遺跡の調査と澎湖産と考えられる玄武岩製石器の分布論的研究から、その後の数次の分布調査などを踏まえて、1983年から臧振華氏による広範囲に及ぶ分布調査と試掘、発掘調査が実施された。その報告書が1992年に刊行され（Tsang 1992）、紀元前3000年から前2000年頃の先史時代と歴史時代（唐末～宋代）の遺跡についてその内容を知ることができる。

また、高宮廣衛、宋文薫、連照美氏による澎湖群島の調査研究の成果が発表されている（高宮・宋・連2001）。調査研究史を踏まえ、とくに石器製作址が確認されている七美島の踏査成果が報告されている。

そこで、本稿では臧氏による報告書を中心に、先史時代における澎湖群島の様相を整理し、筆者が取り組んでいる東南中国の先史文化に関する検討内

容を加味しながら、台湾海峡兩岸の地域間交流の復原に向けての比較研究に関する諸問題について考察を加えたい。

1. 澎湖群島の考古学研究と先史遺跡の概要

(1) 考古学研究の動向と問題の所在

澎湖群島における考古学的発見は日本統治時代に遡る。この点に関しては、国分直一氏の論考（1950）に詳しく述べられており、1907年にすでに石器が発見されていることが報じられた。その後、1940年に国分直一氏によって、澎湖島の良文港で縄蓆紋土器を包含する遺跡が発見された。遺物包含地は約60mの間隔で2ヶ所確認され、東側の貝層（A地点）は径約15mの範囲、西側の貝層（B地点）は径約40mの範囲に広がっている。出土遺物については、狭い口縁をもつ縄蓆紋土器を主体としている。破片資料が多く、土器の形態を復原することはできないが、口縁上面に彩紋を施す点が特徴的である。彩紋は平行帯状を呈し、黒褐色と赤褐色、淡紅に大別される。この良文港遺跡における彩紋土器の発見は、台湾における初めての出土例となった（国分直一1950）。また、出土土器や石器石材を通じて、台湾南部との文化関係が追求された（国分直一1943）（第2図）。

第2次大戦後、台湾大学の林朝棨氏による踏査が行われ、11ヶ所の遺跡が発見された。粗縄紋、細縄紋、無紋、彩紋土器を含む先史遺跡と歴史時代（宋代）の遺跡に大別され、先史時代の遺跡には良文港遺跡、沙港遺跡、赤嵌遺跡、通梁遺跡、竹篙湾A遺跡が含まれる。その後も、台湾大学考古人類学系によって踏査や試掘調査が実施され、澎湖群島の考古遺跡の時間的変遷が明らかにされるようになった。これらの調査については、前述した高宮氏らの報告に詳しい。

そして、1983年に臧振華氏による澎湖群島の調査が開始され、全面的な遺跡踏査と発掘調査が実施されている。同調査では、澎湖群島に属する32の島

第1図 澎湖群島の位置と周辺の遺跡
(原図：Tsang 1992)

第2図 台湾の先史遺跡と橄欖石玄武岩出土遺跡
(原図：国分1981)

嶼を対象に、91ヶ所（先史時代52ヶ所、歴史時代39ヶ所）の遺跡が踏査され、7遺跡に関して、発掘調査が実施された。これらの成果をもとに、臧振華氏（1989、Tsang 1992）は、澎湖群島における考古学文化の変遷について、資源開発、集落形態、交易形態の3つの視点から検討を加えている。

以上のような研究動向を整理しながら、問題の所在として、次の点をあげておきたい。

澎湖群島の考古学研究は、群島内の考古学文化の変遷が明らかになったことが大きな成果と言えるが、これを踏まえて、如何に台湾本島、東南中国という周辺地域との比較を行うかが問題となる。

こうした比較研究を行う際には、その前提として、時間軸の整理が必要であるのは言うまでもない。東南中国先史時代における時間軸の設定と考古学文化の変遷として、筆者（2001）は以下のように設定した。

I期（紀元前5000年以前） 不定形剥片石器群を代表とする土器を伴わない文化遺存（香港東湾I期文化）。

II期（紀元前4000年以降） 縄紋をもつ粗製土器（縄蓆紋土器）が各地で出現する。

III期（紀元前3000年以降） 福建曇石山文化、広東石峡文化を代表とする（新石器時代後期）。張光直氏（1989）は、曇石山文化にみられる鼎や豆を龍山形成期文化が南へ波及したことによって出現したものと論じている。

IV期（紀元前2000年以降） 青銅器時代前期、印紋陶文化期とされ、福建では曇石山上層期・黄土崙期が含まれる。

一方、劉益昌氏（1988）は、台湾の先史文化を次のように整理し、大陸との関わりについても言及した。ここでは、前述の東南中国における考古学文化の変遷と対応させて整理してみたい。

まず「旧石器時代後期」は長浜文化が相当し、「新石器時代前期」は台湾西海岸の南北にわたって大坌坑文化が広がる。東南中国のII期文化に相当す

るが、絶対年代では、大陸よりも遅くなるとしている。「新石器時代中期」は円山文化前期、牛罵頭文化、牛稠子文化と東部の縄紋紅陶を代表とする文化遺存が相当し、今から4500年～3500年前、一部5000年近くまで遡るとし、東南中国のⅢ期～Ⅳ期に併行するが、文化内容はⅢ期文化に近い。「新石器時代後期」は円山文化後期、植物園文化、芝山岩文化、営埔文化、大湖文化、鳳鼻頭文化、卑南文化、麒麟文化とし、年代は今から3500～2000年とし、東南沿海の新石器時代後期から青銅器時代（Ⅳ期）に併行する。

これを踏まえると、澎湖群島に展開した先史文化は、台湾新石器時代前期から新石器時代中期にほぼ相当し、大陸側では東南中国先史文化のⅡ期文化からⅢ期文化が比較研究の対象となる。

こうした地域間の比較を行うにあたって、従来、個別の文化要素の比較に重点が置かれたが、まず、時間的にも変化する地域文化の中で、文化要素の出現－展開－消長を捉えることが必要である。また、島嶼域という空間的に限られた一地域の考古学文化の把握が可能である点を有効に利用して、島内における遺跡間関係や群島内の島ごとの差異に着目することも重要であると考えられる。

すなわち、澎湖群島と台湾本島、澎湖群島と東南中国沿海側、或いは台湾海峡兩岸地域という大きな単位で設定された地域間交流の復原に対して、遺跡間関係というレベルから再構築する方法を抽出することが課題の一つにあげられる。また、地域間交流を各地域文化の時間的変化の中で捉え、地域文化の動向と地域間交流のあり方を相互に関係させて理解しなくてはならないと考える。

(2) 澎湖群島の先史遺跡概要

ここで、澎湖群島の先史遺跡として、1983年以降の臧振華氏の調査で確認、調査された52ヶ所の遺跡を列挙しておく（表1、第3図）。この内、18ヶ所の遺物採集地点は遺物が少なく、包含層も未確認であり、短期的、臨時的な

第3図 澎湖群島の先史遺跡

表1 澎湖群島における先史遺跡（地図の位置、遺跡名、海拔、採集遺物）

澎湖島

1. 良文港遺跡(Liang-wen-kang) 海拔10~15m、細縄紋土器、石錘、打製石斧、磨製石斧他
2. 鎖港遺跡(Suo-kang) 海拔10m、紅褐色土器、細縄紋土器、石錘
3. 沙港A遺跡(Sha-kangA) 海拔10m、細縄紋土器、石錘、打製石器
4. 北寮遺跡(Pei-liao) 海拔10m、縄紋土器、石錘
5. 南寮遺跡(Nan-liao) 海拔10~15m、細縄紋土器、石錘、打製石斧、玉製装身具の破片
6. 菓葉A遺跡(Kuo-yehA) 海拔10~15m、粗縄紋土器、石器
7. 山嶺腳遺跡(Shan-ling-chiao) 海拔10m、粗縄紋土器、打製石斧、磨製石斧、磨製石鏃
8. 塔神邊遺跡(T'a-Shen-pien) 海拔10m、細縄紋土器、石錘、打製石斧、打製石刀
9. 山水A遺跡(Shan-shuiA) 海拔10m、細縄紋土器、石錘
10. 中西B遺跡(Chung-hsiB) 海拔3m、細縄紋土器、石錘
11. 菓葉B遺跡(Kuo-yehB) 海拔10m、細縄紋土器、石錘
12. 菓葉C遺跡(Kuo-yehC) 海拔20m、細縄紋土器、石錘
13. 菓葉D遺跡(Kuo-yehD) 海拔20m、細縄紋土器、石錘
14. 虎頭山A遺跡(Hu-t'ou-ShanA) 海拔15m、細縄紋土器、石錘、磨製石斧、磨製石刀、剥片石器
(遺物採集地点)
15. 紅礁遺跡(Hung-lo) 海拔10m、石錘
16. 湖東遺跡(Hu-tung) 海拔15m、細縄紋土器
17. 安宅遺跡(An-chai) 海拔10m、石錘
18. 南湾遺跡(Nan-wan) 海拔9m、細縄紋土器、石錘

吉貝嶼

19. 吉貝E遺跡(Chi-peiE) 海拔10~15m、紅褐色土器、細縄紋土器、石錘
20. 吉貝A遺跡(Chi-peiA) 海拔10m、細縄紋土器、石錘
21. 吉貝C遺跡(Chi-peiC) 海拔7m、細縄紋土器

白沙嶼

22. 赤嵌A遺跡(Ch'ih-k'anA) 海拔5m、細縄紋土器
23. 赤嵌B遺跡(Ch'ih-k'anB) 海拔5m、細縄紋土器、石錘、稻糊圧痕土器
24. 赤嵌頭遺跡(Ch'ih-k'an-t'ou) 海拔10m、土器片、石錘、石刀
25. 岐頭C遺跡(Ch'i-t'ouC) 海拔6m、細縄紋土器、石錘、石斧鏃
26. 講美遺跡(Chiang-mei) 海拔5m、細縄紋土器、石錘、磨製片刃石斧、打製石刀
27. 蒔板頭山遺跡(Shih-pan-t'ou-shan) 海拔12m、縄紋土器、素面紅灰陶
28. 小岐頭遺跡(Hsiao-ch'i-t'ou) 海拔5m、細縄紋土器、石錘、貝殼
(遺物採集地点)
29. 通梁A遺跡(T'ung-liangA) 海拔5m、石錘

漁翁島

30. 内坂B遺跡(Nei-anB) 海拔6m、細縄紋土器、石錘、凹石、磨製、打製石斧、玉製裝身具
31. 内坂A遺跡(Nei-anA) 海拔9m、細縄紋土器、石錘
32. 竹篙湾(Chu-kao-wanA) 海拔28m、細縄紋土器

中屯嶼

(遺物採集地点) 33. 中屯C遺跡(Chung-t'unC) 海拔3m、磨製片刃石斧

牛母件嶼

(遺物採集地点) 34. 牛母件A遺跡(Niu-mu-chienA) 海拔1m、石錘

鳥嶼

35. 鳥嶼A遺跡(Niao-yüA) 海拔10m、細縄紋土器、石錘

虎井嶼

(遺物採集地点) 36. 虎井遺跡A(Hu-chingA) 海拔20m、石錘

望安島

37. 鯉魚山A遺跡(Li-yü-shanA) 海拔5~10、細縄紋土器、素面紅灰色土器
38. 東安B遺跡(Tung-anB) 海拔9m、細縄紋土器、石錘
39. 東安C遺跡(Tung-anC) 海拔20m、細縄紋土器、石錘、打製石斧
40. 水坡C遺跡(Sui-anC) 海拔15m、細縄紋土器、石錘

(遺物採集地点)

41. 西坡A遺跡(Hsi-anA) 海拔10m、石錘
42. 布袋港B遺跡(Pu-tai-kangB) 海拔15m 無紋紅灰色土器、打製石斧

將軍澳嶼

43. 將軍澳A遺跡(Chiang-chün-aoA) 海拔15m、細縄紋土器、石錘

(遺物採集地点)

44. 將軍澳B地点(Chiang-chün-aoB) 海拔10m、粗紅色土器、磨製石刀の破片、打製石刀
45. 將軍澳C地点(Chiang-chün-aoC) 海拔10m、紅色土器、石錘

七美嶼

46. 南港遺跡(Nan-kang) 高度10~35m、細縄紋土器、石錘、磨製石斧、打製石斧
47. 海豐遺跡(Hai-feng) 海拔10m、細縄紋土器、石錘

(遺物採集地点)

48. 西湖(Hsi-hu) 海拔8m、紅色土器、打製石器、磨製石器の破片

花嶼

(遺物採集地点) 49. 花嶼A遺跡(Hua-yüA) 海拔20m、打製石斧、石刀

50. 花嶼B遺跡(Hua-yüB) 海拔40m、打製石斧

東吉嶼

(遺物採集地点) 51. 東吉A遺跡(Tung-chiA) 海拔8m、石錘

西吉嶼

(遺物採集地点) 52. 西吉A遺跡(Hsi-chiA) 石錘

居住形態を示しているとされる。

また、細縄紋土器を主体とする時期（鎖港期）になって、遺跡数の増加に伴い、澎湖群島内に拡散する様相を捉え、また鎖港遺跡などを例に定着的な居住形態の出現を認めている。一方で、短期的な居住形態、キャンプサイト的な遺跡が確認されている点は、今後、遺跡群として捉えることも必要となるろう。

採集土器は縄蓆紋土器（粗縄紋土器、細縄紋土器）、無紋土器がみられ、それがほぼ単一の帰属年代を示す。分布調査や試掘、発掘調査の結果から、ほとんどが単純遺跡であり、遺跡の継続時間が短いことを示している。

ここで、大陸側（東南中国）と比較してみると、Ⅱ期は同様に単純遺跡が多く、遺跡自体の継続性は短いという各地に共通した様相を示している。しかし、Ⅲ期になるとほとんどの遺跡がⅣ期まで継続していることを考えると、鎖港期の定着的な居住形態も、東南中国と比べると遺跡の継続時間は短いようである。

(3) 主な遺跡の発掘成果

次に、試掘及び発掘調査が実施された遺跡について、調査内容と出土遺物について、その概要を整理してみたい。

①菓葉A遺跡

澎湖本島東端の海岸砂丘地帯に立地し、現在の海岸線から約200mの所に位置する。1984年8月4日～25日に発掘が実施された。

同遺跡では貝殻及び遺物散布の範囲として3ヶ所（A地区、B地区、C地区）が北から南へ約80mの間隔で分布している。A地区は現在墓地になっているため、B地区3ヶ所のトレンチと2×2mの試掘坑が設定された。各トレンチには2×2mの試掘坑7～8ヶ所が含まれる。C地区にも2ヶ所の試掘坑が設定され、合計26ヶ所の試掘坑、発掘面積104㎡である。

主な調査成果としては、粗縄紋土器を主体とする文化遺存として、炉跡と

考えられる直径約1mの円形敷石遺構が確認された。土器以外には、石器の数量は比較的少なく、また自然遺物は貝類が主体で、魚骨、獣骨は少ない。短期的な居住を示していると考えられる。

縄紋土器は2種類、粗縄紋（縄目の幅約2mm）は全土器数（4425点）の83.7%を占め、細縄紋（幅約1mm）は2%に過ぎない。出土石器は39点、凹石13点、叩き石5点、石錘5点の他、磨製石斧、剥片石器（打製石刀）、打製石器（打製石斧を含む）などである。

なお、高宮氏らは、片刃石斧の内、平面形態から狭刃型を認め、八重山諸島との関わりについて問題提起している。

②鎖港遺跡

澎湖本島東南の海浜に立地し、現在の海岸線から約400mの所に位置する。1983年12月8日より同月末まで調査が実施された。遺跡は広範囲に及び、将来的な発掘調査も考慮して、遺跡全体に5×5mのグリッドを設定し、その内、10グリッドにおいて発掘が実施され、総面積は227.5㎡である。

主な調査成果は細縄紋土器を主体とする文化遺存として、墓葬4基が確認された。1号墓葬には抜歯の痕跡が認められる¹⁾。

出土土器は細縄紋土器を主体とし、土器胎土や器形、紋様（彩紋）については後述する。

石器は476点、その内、石錘409点と大多数を占め、その他に、磨製石器26点、凹石12点、打製石斧5点、磨製石斧2点、打製石刀2点、磨製石刀3点などである。

③南港遺跡

七美嶼に所在し、1983年に発見、1985年1月12～15日まで試掘調査が実施された。4つの試掘坑（2×1.5mが3ヶ所、1×0.5mが1ヶ所）が設定された。貝層が10～50cmの厚さで堆積し、その下は玄武岩の変質した地山層が確

認められ、試掘坑Aの西側では貝層上に厚さ10cmの暗褐色砂質土層が堆積し、多くの土器片が含まれていたことが報告された。

石器は豊富で鎖港遺跡と同様、玄武岩製の石錘が大多数を占め、他に玄武岩製の打製石斧、石刀などを含む。また、地表及び発掘区から多くの不定形で未使用の剥片がみられることから、居住遺跡としての性格以外に、石器製作址であると考えられている。

また、骨製の銛先やサンゴ製品が出土している。サンゴ製品は円錐形に近い形態を呈するものであるが、用途は不明である。

④赤嵌頭遺跡

白沙島に所在し、1983年に発見、1984年11月16・17日の両日に試掘調査が実施された。2ヶ所の試掘坑(2×2m、1×1.5m)が設定され、試掘坑Aでは表土下30cmで貝層が20～30cmの厚さで堆積していた。

出土土器片は78点、その内37点が紅褐色土器を占める。90%以上が無紋、黒褐色3点に細縄紋が施されているに過ぎない。石器は50点、内石錘47点、凹石1点、剥片石器1、磨製石斧の破片1点である。

2. 澎湖群島における先史文化の変遷と周辺地域との文化関係

(1) 先史文化の変遷と周辺地域との比較に関する問題点

まず、臧振華氏(1989、Tsang 1992)の報告から、澎湖群島の考古学文化の変遷と周辺地域との関わりについて整理してみたい。

臧氏は、主要な土器群の変遷と放射性年代測定値をもとに、澎湖群島の先史時代について、粗縄紋土器を代表とする「菓葉期」(今から5100～4600年前)－細縄紋土器を代表とする「鎖港期」(今から4700～4300年前)－無紋紅色土器と灰黒色土器を代表とする「赤嵌頭期」(今から4200～4000年前)という考古学文化の変遷を整理している。これを東南中国の時間軸の大枠に

対応させると、菓葉期がⅡ期～Ⅲ期前半、鎖港期がⅢ期後半、赤嵌頭期がⅢ期終末期に位置付けられる。

そして、澎湖群島の先史文化は、台湾西南海岸地域と密接な関係を有していたとし、直接的な系譜関係を台湾西南地域に求めている。

具体的には、菓葉期は鳳鼻頭遺跡下層を代表とする粗縄紋土器文化に近いが、年代的には遅れる。鎖港期は細縄紋土器文化（縄紋紅陶文化）に関連し、年代も近い。赤嵌頭期の土器は台湾西南海岸地域の砂質赤色土器や黒陶文化の土器に類似し、年代もほぼ一致する。

さらに、対岸の東南中国沿海側との文化関係に言及している。広範囲に広がる縄紋陶（縄蓆紋土器）文化の内、菓葉期に類似するのは、潮安陳橋、海豊沙坑、増城金蘭寺、香港深湾遺跡などを含む広東沿岸で、粗縄紋、劃紋、彩絵が施された土器、石斧、凹石、石錘などの石器、魚介類を主とする採集形態をあげている。次に、鎖港期については、広東、福建の縄紋陶文化の中で、とくに福建大帽山遺跡をあげ、他に疊石山遺跡と深湾遺跡の出土遺物にも類似性を認めている。しかし、赤嵌頭期については、大陸沿岸には類似の要素が認められないとしている。

ここで、周辺地域との比較にあたっての問題点を整理する。

菓葉期については台湾及び東南中国の共通性として大盆坑文化が設定されているが、加藤晋平氏（2000）は、「多種類の文化要素を包括的にひとまとめにした」もので、詳細な文化交流の検討にあたっての比較研究を行うには不十分な点を指摘している。具体的には、東南中国の貝殻紋土器の検討を加えた上で、菓葉A遺跡において、貝殻紋土器が全くみられない点を問題としている。

また、台湾先史文化の変遷を解明する上で、大盆坑文化とその後続時期における連続性と外来文化の波及は重要な問題であり、この点に関して、臧振華氏（1990）は細縄紋土器文化を検討する中、鎖港遺跡の出土土器について検討を加えている。

まず、台湾南部の細縄紋土器文化について、従来、牛稠子類型と墾丁類型に区分されていたのに対し、牛稠子遺跡は、細縄紋土器文化の単純遺跡ではなく、また正式な報告もないことから、標準遺跡とするのは適当でないことを指摘した。そして、鎖港遺跡は詳細な発掘を踏まえた報告があり、また細縄紋土器文化期の集落遺跡であることから、標準遺跡として取りあげた。

そして、澎湖諸島の細縄紋土器文化のこうした新しい発見により、細縄紋土器文化の系譜について、新たな見解を提出している。

それは、放射性年代測定値によって、澎湖諸島における大坵坑式縄紋土器文化（菓葉期）と細縄紋土器文化（鎖港期）は時間の断続がみられず、出土遺物においても、連続性が認められる。そして、澎湖群島の細縄紋土器文化と台湾本島、とくに西南部を比較すると、鎖港類型は大坵坑文化の特徴を保持しているのに対し、墾丁類型や鳳鼻頭類型には新しい外来要素が多くみられる。こうした差異は、地域的な変化ばかりか時間的な差を示すものと理解している。

また、臧氏は澎湖群島における細縄紋土器文化の内容をみると、生態環境の変化に伴い、海洋資源の開発が強化されると同時に、海上航行や海上活動を通じた近隣地域との交易活動の進展によって、台湾海峡兩岸地域において人と文化の交流の機会を促し、台湾細縄紋土器文化に見られる文化変化、例えば稲作農耕の出現や張光直氏が捉えた「龍山形成期文化」の要素の出現が生み出されたと論じている。

このように、地域文化の時間的な変遷の中で、地域間交流の果たした意義を認めた点は重要な見解であるが、前述した加藤氏の指摘のように、台湾海峡兩岸地域の先史文化の比較にあたって、従来、認識されていた共通性や比較を行う要素の抽出の仕方にさらに検討を加える必要があると考える。この点を踏まえて、次に鎖港期について具体的に検討を加えてみたい。

(2) 鎖港期の検討

鎖港遺跡は、澎湖群島で発掘調査が実施された遺跡として、面積も広く、同時期とされる遺跡に南港遺跡などの発掘事例もあることから、鎖港期は澎湖群島の先史文化の中で、資料的に豊富であると言える。

また、筆者(2003)は、東南中国沿海側を舞台とした文化交流を時間軸の中で整理し、河姆渡遺跡第2層相当期の寧紹平原から舟山群島、さらに福建沿岸(海壇島)にかけての文化の広がり、曇石山上層文化期(Ⅳ期前半)の沿海側を中心とした彩陶の広がりから、紀元前4千年紀中頃と紀元前2千年紀中頃(紀元前1500年前後)に長江下流域から環南中国海地域に広がる沿海地域間の交流を想定した。こうした広範囲の文化交流が活発化した時期の狭間にあるのが、澎湖群島における鎖港期と言うこともできる。

さらに、鎖港期になって、遺跡数の増加と澎湖群島全域に広く遺跡が分布するようになる。これは、澎湖群島内の遺跡間の比較を行うことができる点においても有効であろう。

ここで、鎖港遺跡の出土遺物について、先行時期の菓葉A遺跡と同時期の南港遺跡の出土遺物を比較しながら検討してみたい。

鎖港遺跡出土の土器破片は11,908点、紅褐色土器がその内94.2%を占める。約60%に細縄紋が施されている他、彩紋土器片が50点出土している。

報告書では土器口縁部(814点)について、詳細に検討が加えられ、その中で、甕形土器の口縁形態を9類に分類している(第4図)。

先行時期の菓葉A遺跡では口縁部形態の大多数を占めるC類(全口縁部片358点の内、308点)が、鎖港遺跡では15.1%(全口縁部814点の内、123点)と減少するが、他の口縁部片より出土量も多い点は変わりなく、菓葉A遺跡との連続性がうかがえる。この連続性は甕形土器の彩紋には共通する点であり、口縁部上に平行した帯状に彩色が施されている例は口縁部C類に多くみられるようである(第5図9・10)。また、菓葉A遺跡で口縁部上の紋様として彩紋(同図1~3)の他に、平行した沈線が施されたものがあげられる

(同図4・5)。口縁部形態は、C類より端部が肥厚し、内側がやや内湾したものの(F類とされる)に限られるが、鎖港遺跡では、この沈線紋も口縁部F類も出土例がみられない。また、菓葉A遺跡の彩陶には、胴部に点状に施されたものが含まれる(同図9・10)。これについて、疊石山下層の彩陶との類似性も指摘されているが(郭2000)、鎖港遺跡では胴部に線状の彩紋が施されるようになる。彩紋土器については、これまでも台湾海峡兩岸地域の比較の要素として取りあげられてきたが、ここで検討したように彩紋の種類と施紋部位、器形の相関関係を通じて、各地域の彩紋土器の特徴を明らかにしなくてはならないであろう。澎湖群島の一つの代表的な彩紋土器として、口縁部(C類)上部に施された平行帯状の彩紋があげられ、これが菓葉期と鎖港期の連続性を示す要素として抽出することができる。

第4図 鎖港遺跡の出土土器口縁形態
(Tsang 1992より)

第5図 出土土器の比較

1～8：菓葉遺跡

9・10：鎮港遺跡

(実測図出典：Tsang 1992)

11：良文港遺跡

(実測図出典：国分1981)

こうした出土土器の研究は、加藤晋平氏（2000）が貝殻紋土器を取りあげる際、貝殻紋の施紋方法、施紋部位、器形に着目した視点と共通するものであり、今後、台湾海峡兩岸地域のこれまでひとまとめに括られていた土器群の具体的な比較検討の方向性を示すことになると思う。

一方、同時期とされる南港遺跡出土土器は、基本的に鎖港遺跡と類似し、口縁部形態の多様化と例えば口縁部G類については、鎖港遺跡と共通しているが、相違点としては口縁部C類が欠如している点などが指摘されている。

ただし、同じ細縄紋土器文化に帰属すると考えられる良文港遺跡の彩陶は、紋様の種類、施紋部位、口縁形態において、鎖港遺跡と一致している。

また、鎖港遺跡出土土器の一つの特徴として、約20%の土器の胎土に貝殻混入が認められ、これは菓葉A遺跡ではみられない点である。具体的な数量では、鎖港遺跡出土土器点数の過半数（51%）を占める紅褐色土器で細縄紋が施された土器片の内、23%に貝殻混入が認められる。一方、南港遺跡では、細縄紋の紅褐色土器1693点の内、僅かに4%に過ぎない。

このように同時期における遺跡間の相異点について、時間差と捉えるか、或いは地域差と捉えるか、検討を要する課題となろう。少なくとも、鎖港遺跡と南港遺跡を比較すると、鎖港遺跡はより菓葉A遺跡との連続する要素が多く含まれていることがわかる。いずれにしても、出土土器について、典型的な要素の比較ばかりでなく、胎土、器形、紋様の相関関係を踏まえた比較研究が必要となり、鎖港期における遺跡差もこれらを踏まえて検討することが必要である。

次に石器については、鎖港遺跡では全出土点数が476点、その内、石錘409点と大多数を占め（第6図1～3）、菓葉遺跡に比べて凹石（同図4・5）は12点でその割合は減少している。

石錘の出土量の増加は、東南中国でも珠江三角州においてⅢ期以降にみられる傾向にあり、趙輝氏（1999）はこの点に着目し、Ⅲ期以降の砂丘遺跡の定着性を指摘している。ただし、拙稿（1999）において、Ⅲ期以降、数量の

第6図 鎖港遺跡出土石器 (実測図出典：Tsang 1992)

増加ばかりでなく、石錘の種類が増加し、かつ石錘を保有する遺跡ごとの差異が認められることを指摘したように、石錘自体の比較も必要となろう。残念ながら、澎湖群島については、図版に掲載されたものが極めて少ないので詳細は不明であるが、少なくとも鎖港遺跡の石錘の実測図掲載分は、菓葉A遺跡に比べて、大きさによる種類が増え、また挟りが明確である。

その他の石器に、磨製石器26点、打製石斧5点（同図7・8）、磨製石斧2点（同図6）、打製石刀2点（同図11）、磨製石刀3点（同図9・10）があげられ、高宮氏らは同遺跡においても「狭刃型石斧」を認めている。

また、磨製石刀や打製石斧は、収獲具（石包丁）や土掘り具としての用途が想定され、それが、農耕との関わりの中で取りあげられている（郭 2000）。注目すべき遺物であるが、長江下流域から東南中国では各々の石器の形態からその系統が追求できるのに対し、鎖港遺跡の出土石器の系統から農耕（稲作）の広がりを見出すことができるような状況ではなく、また、その出現を先行時期からの時間的変遷の中で位置付けすることも難しいのではないだろうか。石器の用途論は、使用痕分析を含めて今後の課題である。

この農耕の問題は、例えば、赤嵌B遺跡から籾殻圧痕土器の出土例や鎖港遺跡の人骨の同位体元素分析によって、大量の野生稲を食した可能性が示唆されるなど、農耕具以外の分析結果も重要であろう。

いずれにしても、郭素秋氏（2000）も指摘するように、イネ利用、稲作の導入を食料大系の中で位置付けることは現時点では難しい。

こうした稲作の導入については、小柳美樹氏（1999）が、「野生イネが生育する華南地方における稲作農耕の定着も、新石器時代晩期以降の良渚文化（本稿Ⅲ期）や印紋陶文化（本稿Ⅳ期）の波及によって生じた社会的現象」と指摘しているように、各地域文化の中での受容のあり方が問われる。

すなわち、澎湖群島における稲作の導入と展開に関しても社会的現象としての農耕の定着を遺跡の研究から考察しなくてはならない。

また、鎖港遺跡で特筆される遺物として、篋状の貝匙（第7図7）と骨製

第7図 鎖港遺跡出土遺物 (実測図出典：Tsang 1992)

釣針（同図8～10）が出土している。骨製釣針4点の内、8は針先が湾曲しない Jabbing タイプとして復原されているもので、柄部の長さが17.1cmをはかり、かなり大型である。他3点は柄部のみ残存している。柄部外側の共通した特徴として、突起を有する点があげられる。報告書では、太平洋地域に一般的な遺物として紹介されているが、中国大陸や台湾において類例がみられない点において、現時点でその位置付けを検討するのは難しい²⁾。

3. 澎湖群島と台湾本島、東南中国の比較研究

台湾海峡兩岸地域の文化関係及び交流を検討するにあたって、呉綿吉氏（1996）が指摘するように、各地の時間軸の整理という前提のもと、個別の文化要素の比較だけではなく、総合的な比較研究と如何なる文化要素の抽出が有効であるかを検討しなくてはならない。

例えば、出土土器にしても、個別要素として特徴的な紋様の抽出とその比較ではなく、土器から得られる様々な属性の相関関係を抽出することが必要である。本稿で検討した土器の形態的特徴（口縁形態）と紋様の相関関係の比較もこの点を踏まえたことに他ならない。また、胎土に関するデータも重要であり、前述したように鎖港遺跡では、貝殻を混入することが、先行時期にみられないが、同時期の南港遺跡と比べると、その割合には差異がみられる。臧振華氏は、貝殻混入が台湾本島ではみられないことから、澎湖群島の在地土器の特徴としており、同時期とされる遺跡間の差異は、澎湖群島内の時期差もあろうが、地域的な土器製作上の差異を示すものかもしれない³⁾。

また、貝製品について、木下尚子氏（1999）による貝珠の検討のように、台湾から琉球列島にかけての先史文化の理解にあたって、キーポイント的な存在として注目される。澎湖群島についても、菓葉A遺跡の貝珠、鎖港遺跡の小型貝匙の出土例が認められる。しかし連照美氏（2002）が指摘するように、澎湖群島は珊瑚礁が発達しながらも貝製品は台湾南部と比較してもあま

り目立たない存在である。一方、骨珠や土製腕輪などの存在は貝以外での素材による製品化もみられることから、各々の器種によって各地域で素材の選択が行なわれたことを示し、各地域文化の特徴を比較する上で注目される。

例えば、鎖港遺跡では土製腕輪が105点出土し（第7図11・12）、4号墓（女性、年齢不詳）からは、腕部に装着された状況で一对の土製腕輪が出土している。南港遺跡からも土製腕輪の出土例が認められる。紋様が施されない点が異なるが、形態的特徴（断面形態）は鎖港遺跡と類似しており、同時期、澎湖群島において土製腕輪が一般化していることを示す。

土製腕輪については、1931年に宮原敦氏（1931）によって墾丁寮A地点20号墓から20年代女性の腕部から土製腕輪2点が出土したことを報じられた。その際、宮原氏は、それ以前から台南烏山頭や台中水底寮に所在する遺跡において多数の土環を確認されていたことを踏まえて、その形状や大きさから腕輪である可能性が高いと認めながらも、破損し易い土製品を日常に用いていたことに疑問をもたれていたのに対し、墾丁寮遺跡の墓葬出土例の意義を認めた。そして、墾丁寮からは、南烏山頭や台中水底寮に比べて包含層中には僅かしか土環が出土しない点に着目し、地理的な環境から海に近く貝類が豊富な墾丁寮では貝輪が多く製作されたのに対し、他では土製品が多くみられる点を指摘した。

この土製腕輪と貝製腕輪の問題にしても、比較する文化要素の抽出と各地域文化の中での位置付けが問題であり、貝器製作の中での位置付け、装身具としての位置付けが問われる。

また、搬入、搬出品と考えられる要素の抽出とその広がりも、澎湖群島と周辺地域、この場合は、とくに台湾島との文化関係を示す上で重要であろう。まず、澎湖群島からの搬出品には、石材としての橄欖石玄武岩が古くから指摘されてきた。

国分直一氏（1943）は、台南台地東縁に位置する牛稠仔遺跡から300点近くの橄欖石玄武岩を用いた石斧を採集し、石斧については他の石質を用いた

ものが少なく、石斧以外にはスレート、砂岩を用いていることを報告し、台湾西部平野地方の南部地方と付近島嶼における類例の集成を行った。そして、南部平野地方には産しない橄欖石玄武岩の搬入ルートについて、次のように検討を加えた。

橄欖石玄武岩は、中央山脈の山麓に産するが、ここから石材を発見、採集、運搬する困難さを考えると、澎湖群島は豊富な産地として、採取、運搬にも適していたとした。そして、地質学者の報告によって、出土石斧の石質が澎湖群島の基盤をなすものと酷似することを、その根拠とした⁴⁾。

さらに、澎湖群島の良文港遺跡と高雄桃仔園遺跡の縄蓆紋土器が類似することから、両者の間に何らかの関係を指摘している。

最近の調査では、澎湖群島の七美嶼で大型の石器製作址3ヶ所の試掘調査が実施されている。試掘調査と分析の結果、その製品は台湾西海岸に大量に搬出されており、澎湖群島と台湾本島の間には頻繁な海上交通があったことが示唆される（焦天龍2002）。今回、その詳細を確認することができなかったが、石材の広がり或いは製品の広がりを検討するにあたって、製作技術から、各遺跡の石器組成の中での位置付けなど、やはり総合的な比較研究が問題にあげられる⁵⁾。また、焦氏は大陸側の福建における石器石材との比較検討の必要性を指摘し、実際に福建の玄武岩製石器の石材分析が進行中であることを紹介している。

一方、台湾本島からの搬入品と考えられる要素として軟玉製の小型片刃石斧が鎖港遺跡から5点出土し（第7図2～6）、小型で断面四角形で鑿状製品と考えられる⁶⁾。軟玉製品はこの他にポイント状製品、針状製品、ペンダントがあり、鎖港遺跡以外にも南港遺跡などの鎖港期の遺跡からも出土している。その中でも、鎖港遺跡3号墓（男性、成年）は墓坑が未確認であるが、人骨の周辺から磨製石斧、打製石斧、軟玉片刃斧2点、貝製品が出土していることを考えると、墓葬副葬品の可能性もあり、搬入品の性格を検討する上で出土状況の検討は重要である。

また、スレート製の磨製石鏃が菓葉A遺跡から1点出土している。中央から先端部が欠損しており、形態的な特徴は不明であるが、スレート製であることによって台湾本島からの搬入品と考えられている。また、鎖港遺跡からは磨製有孔石鏃が出土している（同図1）。やはり先端部が欠損しているが、スレート製である。このように、材質が台湾本島産のスレート製であることから、搬入品である可能性が高いが、石鏃は両遺跡とも1点のみで、他の石材を用いた石鏃の出土例もみられないことから、澎湖群島内における石鏃の稀少性を示し、これは澎湖群島内における生業形態における石鏃の役割にも関わる問題となろう。

そして、澎湖群島内の島嶼間の交流に関しても、玄武岩が産しない花嶼においても玄武岩製打製石斧が採集されており、他島からの搬入が指摘されている。こうした玄武岩という石材の動きは、台湾本島との関わりばかりでなく、群島内のモノの動きを的確につかむ上でも有効となる。とくに鎖港期において、石器生産の体制が確立し、遺跡が群島内に広く分布するようになると同時に石材を中心としたモノの動きが捉えられることは、群島内のネットワークの強化が示され、その延長線上に台湾島や東南中国との地域間交流が見出されるのではないだろうか。

鎖港期の前後に、前述したように東南中国沿海側に活発な地域間交流の動きが想定される。鎖港期も周辺との地域間交流を示す要素もみられるが、むしろ、内部展開が促進された時期と位置付けることができるかもしれない。

まとめ

本稿では、台湾海峡に所在する島嶼域としての澎湖群島における先史文化の動向を、海峡兩岸の地域間交流の中で位置付けるための問題点を検討した。

まず、澎湖群島の考古学文化の時間的な変遷の中で、比較する文化要素の出現、展開、消長を明らかにし、時間的に前後する考古学文化間の中での連

続性と変化を捉えることが必要であり、本稿では、とくに彩紋土器と各種の石器を比較した。

また、各要素の遺跡ごとの差異、諸島内の島ごとの差異、周辺地域の文化、とくに本土文化との差異という異なるレベルでの比較研究が必要であると考える。この点を踏まえて、本稿では鎖港期を中心に、遺跡間の比較を試みた。実際には、遺跡の発掘事例が少なく、筆者が把握している内容も限られており、十分に検討を加えることができなかつたが、比較研究を行う上での問題点を整理した。

こうした遺跡間の比較は、澎湖群島における考古学文化の変遷として、居住形態の変遷、生業形態の変遷を明らかにする上でも、一つの前提になると考える。

まず、居住形態の問題として、鎖港期における定着的な居住形態は、これらの拠点的な集落と周辺のキャンプサイトとの関りを考慮すべきであり、島ごとの遺跡の差異も含めて各地域文化を構成する遺跡群の検討が必要である。

また、生業形態の変遷について、澎湖群島を含む台湾海峡兩岸地域において稲作の導入が問題であるが、本稿で触れたように社会的に定着していたかどうかの問題は、遺跡ごとの生業形態の比較から、同一時期における稲作の一般化をどこまで追求できるかが問題となろう。長江下流域でみられるように稲作に伴う農耕具の定形化が認められず、また先行時期との比較で農耕の導入自体が明確に遺物組成に反映されない状況を鑑みると、東南中国と同様、稲作の定着とそれに伴う地域社会の変容は、さらに遅くなるのかもしれない。ただし、東南中国はIV期以降、周辺との地域間交流と地域文化の変容が顕著になるが（後藤1999）、澎湖群島における赤嵌頭期以降については、その文化内容は不明であり、東南中国IV期に相当する考古学文化も確認されていないようである。

そして、地域間交流にしても、群島内の遺跡間の比較を踏まえた上で、台湾島や東南中国という地域間の比較を行うことが今後の課題になるであろう。

とくに、石器石材の動きは、群島内の遺跡間関係を踏まえた上で、台湾島との地域間交流まで、さらに広がりを見せるようになると思われる。

註

- (1) 連照美氏 (1987) は、台湾における抜歯の事例を集成し、比較研究する中、抜歯のタイプとして、大陸型は上顎左右の側切歯を抜く、台湾型は上顎の側切歯と犬歯を抜くタイプに大別できる可能性を指摘し、鎖港遺跡の抜歯例は大陸型の抜歯のタイプに含まれ、さらに、遺跡内の抜歯が施された率も低いことに注意している。
- (2) 高山純氏 (2000) は、九州隼人のインドネシア起原説を検討するにあたり、フィリピン、台湾、南西諸島の考古資料の検討を加え、漁撈技術に関する検討の中、澎湖群島出土の骨製釣針や銚頭に注目している。また、鎖港遺跡出土の骨製釣針の材質について、台湾において鹿角製品が普遍的であることから、鹿角製の可能性を指摘している。
- (3) 報告書の中で、胎土分析の結果も記載されている。
- (4) 桃仔園遺跡、牛稠仔遺跡出土の玄武岩石器と良文港遺跡出土の玄武岩製凹石について、顕微鏡下の観察によっても、橄欖石を含む玄武岩で同種のものであることが紹介されている (国分直一1950)。
- (5) 石器製作址に関する調査、研究については高宮氏らの報告に詳しい。とくに石材同定、石器製作技術の研究が進んでいる点は重要である。
- (6) 国分直一氏 (1950) は、良文港遺跡の石器に細長の角柱状石器の破片が含まれていることを報告している。硬質の緻密な砂岩製であることから、台湾島からの搬入品の可能性も指摘している。

引用文献

- 郭素秋2000「台湾の縄文土器について」『東南アジア考古学』第20号, 17~47
- 郭素秋2002「台湾及び福建の彩文土器について」『東南アジア考古学』第22号, 1~24
- 加藤晋平2000「閩・粵・台地域における先史文化の交流問題」『博望』創刊号, 2~12
- 木下尚子1999「東亜貝珠考」『先史学・考古学論究Ⅲ』315~354
- 国分直一1943「台湾南部における橄欖石玄武岩を用いた石器」『台湾地学記事』IX-3・4号（国分直一1981『台湾考古民族誌』242~250に収録）
- 国分直一1950「澎湖本島における先史遺跡と遺物」『農林省水産講習所研究報告』人文科学篇5号（国分直一1981『台湾考古民族誌』165~177に収録）
- 呉綿吉(劉茂源訳)1996「台湾海峡兩岸地区の新石器文化研究」『国分直一博士米寿記念論文集—ヒト・モノ・コトバの人類学』慶友社, 411~421
- 後藤雅彦1999「珠江三角州地域をめぐる先史文化研究」『琉球大学法文学部人間科学科紀要 人間科学』第4号, 61~88
- 後藤雅彦2001「琉球列島先史文化と環中国海地域の比較研究(1) —平成13年度研究中間報告」『琉球大学考古学研究集録』第3号, 59~66
- 後藤雅彦2003「琉球列島先史文化と環中国海地域の比較研究(2) —平成14年度研究中間報告」『琉球大学考古学研究集録』第4号, 49~66
- 小柳美樹1999「稲と神々の源流—中国新石器文化と稲作農耕—」『現代の考古学3 食料生産社会の考古学』朝倉書店, 72~99
- 焦天龍2002「東南沿海的史前文化與南島語族的拡散」『中原文物』2002-2, 13~16
- 臧振華1990「論台湾的細繩紋陶文化—兼論台湾史前文化来源問題研究的概念和方法」『田野考古』第1卷第2期, 1~31
- 臧振華1989「澎湖群島拓殖史的考古学研究」『中央研究院第二届國際漢学会論文集 歴史與考古組』87~112
- 高宮廣衛・宋文薫・連照美2001「澎湖群島の考古調査」『南島文化』第23号, 93~111
- 高山純2000「南方起原説の検討—特に九州隼人のインドネシア起原説を中心に—」『琉球・東アジアの人と文化』下巻, 359~388

張光直1989「新石器時代の台湾海峡」『考古』1989-6, 541~550

趙輝1999「珠江三角洲地区幾何印紋陶的出現和文化的發展」『中国考古学的跨世紀反思』上冊, 229~250

宮原敦1931「墾丁寮における発掘」『南方土俗』第1卷第3号, 109~112

劉益昌1988「史前時代台湾與華南關係初探」『中国海洋發展史論文集』第3輯, 1~27

連照美1987「台湾史前時代拔齒習俗之研究」『国立台湾大学文史哲学報』第35期, 1~28

連照美2002「台湾史前時代貝器工業初探」『石璋如院士百歲祝壽論文集』299~327

Tsang Cheng-hwa 1992 *Archaeology of the P'eng-hu Islands, Inst. of History and Philology, Academia Sinica*